

Students' Nonverbal Behaviour in Public Speaking: Evaluations and Teachers' Perceptions

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Fukasawa, Nozomi, Morimoto, Kazuki, Umezawa, Kaoru, Netsu, Makoto メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24517/00062731 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



論文

パブリックスピーキングにおける非言語行動の 評価と教師の意識

深澤 のぞみ・森本 一樹・梅澤 薫・根津 誠^{注1}

要 旨

外国人対象の日本語教育において、パブリックスピーキングは重視されてきているが、その中で非言語行動の扱いについてはまだまだあまり研究がされていない。そこで本稿では、実際に日本語のスピーチ指導をした経験を持つ日本語教師を対象に調査を実施した。その結果、調査対象者全員がスピーチ指導の際には非言語行動を指導すると回答し、視線行動や姿勢、手の動き、顔の表情を主な指導項目として挙げた。評価の仕方については、非言語行動の種類によっても異なる結果が出た。また非言語行動の指導や評価をどのように考えて行うべきかについてはさまざまな意見が出され、今後の詳しい調査が必要なことがわかった。

キーワード：パブリックスピーキング、非言語行動、評価

I はじめに

外国人日本語学習者に対する日本語教育において、口頭コミュニケーション教育は、最も重視されてきた項目の一つである。口頭コミュニケーション教育の中では、多岐にわたる教育実践が行われてきているが、これらの教育実践はいくつかの種類に分けられる。いわゆる雑談や、依頼を行ったり苦情を言ったりするなどの機能を持つ会話、ディスカッション、ディベート、スピーチ、アカデミックプレゼンテーションなどである。そしてこのうち、スピーチやプレゼンテーションなどのパブリックスピーキングは昨今ますます重視されつつあり、特にスピーチは、発表会やコンテストという形で、日本語授業の一学期のまとめのように行われるものから、学校内での実施、さらには地域や国単位で大々的に実施されるものなど、盛んに行われている。しかしそれに比して、スピーチコンテストの意義や、コンテストで行われるスピーチの特徴や評

価方法などについては、あまり研究がされていない。スピーチの説得力がどのような要素と関係するのかについて、特に非言語行動はこれまでそれほど多くの関心が持たれているとは言えないが、深澤(2019)は、パブリックスピーキングの非言語行動はスピーチの説得力と関連がある可能性があり、さらにジェスチャーなどの非言語行動をスピーチ内で使用するかしないかは、文化差がある可能性もあると指摘している。そこで本研究では、スピーチで見られる非言語行動についての基礎的調査として、非言語行動をどう認識し評価するかについて検討してみることにした。具体的には、スピーチを指導することの多い教師が非言語行動をどのようにとらえ指導しているか、また非言語行動をどう評価するのか、アンケート調査をもとに分析する。

II 先行研究

ここでスピーチと非言語行動に関する先行研究を検討する。まず日本語教育に限らず、社会心理学などの立場からのスピーチと非言語行動に関する研究を取り上げて概観する。次に日本語教育や教養科目における日本語のスピーチについて、非言語行動や評価基準との関係について論じた研究を考察する。

1. スピーチと非言語行動に関する研究

藤原(1986)は、スピーチの速度とハンドジェスチャーが説得の効果に影響するかについて実験を行った。これによると、まずスピーチ速度の遅さは聞き手の態度変容^{注2}に影響を与え、説得効果があることがわかった。ただしこの結果はアメリカでの先行研究の結果とは異なる^{注3}。さらにこれにハンド・ジェスチャー(“指立て”と“立て手”)を加えた実験を行ったところ、ハンド・ジェスチャーは態度変容自体には効果をもたらさなかったが、話し手に対して「知的」で「自信のある」人物であるという印象がもたらされることがわかり、結果的に、遅いスピーチにハンド・ジェスチャーが加わると、送り手のメッセージに信憑性が高まると言えることになるという。ただしその後、スピーチの速度については横山・大坊(2008)が、信頼性には効果があるが説得力に効果があるとは言えないとの実験結果を示している。

平林他(2016)は、説得力の強さを感じさせる話し方における非言語行動の特徴を抽出し、モデル化を行っている。同研究では、声の基本周波数が高く(いわゆる高い声)ダイナミックレンジ(いわゆる小さい声と大きい声の差)が広いこと、長いポーズと短いポーズを組み合わせて使っていることが、説得力を高めることがわかった。さらに発話と発話の間には顔を左右方向に動かして聴衆を見渡し、発話中は顔動作を静止さ

せると、説得力を高めることが明らかになったという。

このことから、非言語行動はスピーチに説得力を持たせることに一定の影響を及ぼしていると考えられる。

2. スピーチにおける非言語行動の評価や指導に関する研究

次に、日本語教育の一環として行われるスピーチコンテストと非言語行動について論じた研究を考察する。スピーチコンテスト自体はかなり以前から実施されており、テレビなどでも放映され認知度が高い「外国人による日本語弁論大会」は、第1回目が1960年に開催され2019年6月には第60回の大会が開催されている^{注4}。英国日本語教育学会と国際交流基金が共催する日本語スピーチコンテストや、日本経済新聞社が開催する全中国選抜日本語スピーチコンテストなど、海外でもその国の日本語教育の一大イベントとしてスピーチコンテストが実施されているケースも少なくない。これらについて、研究課題として扱った報告や論文はそれほど多くはないが、現在検索できるものとしては、2000年前後から見られるようになり、徐々に増えてきているように見える。これは、スピーチコンテスト自体は重視され実際に開催されてきているが、その意義や内容、評価方法などが検討されるようになったのは比較的最近になってからだということになる。

日本語のスピーチと評価などに関する先行研究としては、藤田・フランブ(2009)が、重慶大学におけるスピーチコンテストを教師主導の従来型のスピーチコンテストではなく、教師が介入せず、ピア・ラーニングの概念を基本とした「学年混合のグループ・スピーチコンテスト」の形で行なった報告をしている。このスピーチコンテストでは、中国人5人、日本人2人の日本語科の教師が審査を行っており、審査項目は「内容」、「文法の正確さ」、「発音・アクセント」、「表現力」、「質問への回答」であったという。ここで「表現力」というのが具体的に何を示しているのか、この論文の中からはわからないが、非言語行動を含んでいる可能性がある。次に成田他(2010)は、極東の3地域が持ち回りで開催地となり日本語弁論大会が開催されているが、3地域それぞれの審査基準があり、統一性がないことが問題であると指摘している。そこで、評価基準の明示化を図って上記の3地域共通の審査基準を作成した結果、できあがった審査基準は複雑になったが、評価者ごとの評価のばらつきが小さくなり信頼性が上がり良好に機能したと報告している。この複雑になった評価基準には「運用力」の「プレゼンテーション力」の中に、「スピーチの態度は適切か(姿勢、視線、顔の表情、声の大きさなど)」という項目が含まれている。

藤木(2013)は大学におけるリベラルアーツ科目の1つとして開講されている「オーラ

ルコミュニケーション」で行われる日本語のスピーチについて、よい印象を与えるスピーチの要素は何かというアンケート調査を聴衆となった学生たちを対象に行った。その結果言語的な要素と非言語的な要素では、非言語的な要素、特に音声面での要素が重視される結果となったことを報告している。ただし同研究では音声面の要素の詳細はあまり述べられておらず、主に音声の大きさや聞きやすさのことを指していると思われる。

高橋(2005, 2006, 2007, 2009)は、プレゼンテーションを行うにあたっての、デリバリー・スキル(伝達技術)の重要性を指摘している。どんなに内容がよいものであってもデリバリー・スキルがなければ聴衆にメッセージは届かない。デリバリー・スキルには言語的なものと非言語的なものと2種類あるが、特に高橋は非言語の中の動作(表情や目の動きを含む)と音声であるパラ言語(声の大きさやスピード、さらにポーズや沈黙を含む)が大きい役割を果たすとしている。

矢野(2015)はスピーチやプレゼンテーションを行う際に「話が上手い」と判断されるためにどのような言語的あるいは非言語的な要素が必要なのかを検討し、さらに大学生と社会人、さらに人事担当者がどのように判定するのかを比較した上で、話が上手になるにはどのような訓練が必要なのかを論じている。その結果、非言語面については大学生と社会人と人事担当者のいずれも判定の得点が高かった「聞き取りやすい速さで話す」、「話題と話題、言葉と言葉の間にタイミングのよい間がある」ことが重要で、スピーチやプレゼンテーションの指導の際には、単に「表情・姿勢の良さ」などの身体的な非言語の要素よりも重視すべき点だと結論づけている。

上述の藤木(2013)や高橋(2005, 2006, 2007, 2009)、矢野(2015)はあくまでも日本語母語話者を対象に検討した内容であるため、外国人日本語学習者を対象とした日本語教育の場では、これらで指摘された非言語行動の中に、発音の明瞭さやジェスチャーの文化的な要素なども含まれてくるものと思われる。

最後に、日本語教育ではないが、英語教育において日本人の英語学習者のスピーチに関して学習者が発表中に表出する身体動作を観察して分析した論文として、スナイダー(2010)を挙げる。スナイダーは、英語スピーチの教育ではスピーチの内容について書き方を取り上げたり、発音やイントネーションなどのパラ言語の面での指導を行ったりはするが、非言語面の指導が足りなかったために学習者のスピーチがものたりなく感じるのではないかと思い至り、学習者のスピーチの観察を行った。その結果、調査したうちおよそ3分の1の学生が視線を空中に向けたり横に向けたりアイコンタクトができていなかったこと、6割強の発表がいわゆる「真顔」で行われ、ともすると無表情とみなされるような表情であったこと、何らかのジェスチャーが表出された発表は3割に満たず、その中には「自己接触」(口に手を当てたり髪を触ったりする、

いわゆる癖)が含まれていたことなどを指摘している。これらの事柄についてスナイダーは「べき・べからず」の指導をする必要はないものの、学習者への自らの気づきを促すことが大事だとしている。

Ⅲ 日本語教科書での扱い

日本語教科書において、従来口頭コミュニケーションは重視されてきている。スピーチやプレゼンテーションを含めた教育には、用語が統一されていないという問題や、学習項目や評価基準などが確立されていないという問題があるものの(ヒルマン小林・深澤2011)、スピーチやプレゼンテーションに関する指導項目を含む日本語教科書は、初級から上級まで決して少なくない。そのうちのいくつかを紹介し、非言語行動についての指導内容を概観する。

まず初級用の口頭コミュニケーションに関する教科書として、国際交流基金関西国際センター(2004)『初級からの日本語スピーチ』が挙げられる。この教科書では限られた語彙表現を使いながらも、まとまった話をするためのスキルなどがまとめられている。この中にPresentationという項目があり、「はなし方」として「大きい声」、「ゆっくり」、「ポーズはどこ?」、「読むのではなく話す」、そして「アイコンタクトと笑顔」が挙げられている。また三浦他(2006)『最初の一步から始める日本語学習者と日本人学生のためのアカデミックプレゼンテーション入門』では、「プレゼンテーションをしてみよう」という章の中に「プレゼンテーションにおける話し方」と「プレゼンテーションにおける態度」という節が設けてある。前者ではいわゆるパラ言語を扱っており、後者では非言語行動について説明がされている。具体的には姿勢や手の位置、視線が取り上げられている。

前述の2冊は初級レベルの学習者から使えるパブリックスピーキング指導の教科書であるが、スピーチの非言語行動にかなりの分量の説明を当てているのが特徴的である。日本語レベルが高い学習者向けの口頭表現の教科書として長く使われている『日本語 口頭発表と討論の技術—コミュニケーション・スピーチ・ディベートのために』(東海大学留学生教育センター 口頭発表教材研究会)は、さまざまな種類別のパブリックスピーキングの内容や日本語表現、さらに実施方法について非常に詳しく説明した教科書であるが、この中にスピーチの心構えと準備の要点という項目があり、発表段階でのチェック項目として「聞き手を見て話す」、「大きい声ではっきり発音する」、「みぶりを使って気持ちを表す」と書かれている。詳しい解説はないもののジェスチャーの使用についての言及があることは興味深い。

国際交流基金(2007)『日本語教授法シリーズ6 話すことを教える』は、学習者が手

に取る教科書ではなく特に海外の非母語話者日本語教師を対象とした教授法を紹介した書籍であるが、スピーチの教え方の説明に、スピーチの評価の項目としてスピーチの内容などととも「目線の合わせ方」、「立ち方」が含まれている。

一方で、スピーチやプレゼンテーションの実施のために詳しくその内容や使用する日本語表現などには紙幅を割いている場合であっても、非言語行動には全く触れられていないものも少なくない。積極的な指導をする項目として意識されていない可能性がある。

IV パブリックスピーキングの非言語行動についての日本語教師の意識調査

1. 調査の目的

ここまで見てきたように、パブリックスピーキングにおいて非言語行動は説得に影響を与えていることがわかってきているが、日本語教育で行われるスピーチコンテストにおける評価や、スピーチ指導の場で具体的に非言語行動に関する項目をどのように含めるべきなのかについては、まだあまり報告や研究がされているとは言い難い。そこで本稿では、日本語学習者にスピーチなどのパブリックスピーキングの指導をしたことがある日本語教師を対象に、その傾向を把握するための小規模な意識調査を行うことにした。パブリックスピーキングの指導の際に、非言語行動の指導をどの位含めるのかや、どのように評価するのかなどについて明らかにするためである。

2. 調査の概要

日本語教育に携わっており、パブリックスピーキングの指導を行ったことがある日本語教師を対象にした。日本語母語話者教師も非母語話者教師も含み、また指導している国や機関も特に指定せずに、メーリングリストなどを利用して調査への協力を依頼した。協力者数は38人で、調査は2020年12月中旬から下旬に実施した。表1に詳細を示す。

今回は国内や海外、あるいは国を絞って調査を行うのではなく、実態を把握するための小規模調査であったため、教師の母語や経験や指導している場所などにそれほど意味ある傾向はない。全体的には日本語母語話者教師が多いが、指導している国は日本以外が多く、ベトナムや英国が多い。これは筆者らの関係のメーリングリストなどで調査への協力の依頼をしたことによる。指導をしている期間は大学や大学院が多い。日本語指導の経験年数は15年以上ある協力者が19人でほぼ半数となっている。スピーチ指導の経験がある日本語教師への調査依頼であるため、まだ経験が浅い教師は日々

の授業を担当することが多く、スピーチ指導まで行うことが少ないという事情によるものと思われる。

表1 協力者について

単位 人(%)

| | |
|---------------------|---|
| 母語 | 日本語 24(63.2), ベトナム語 8(21.1), 中国語 3(7.9), タイ語, その他 |
| 日本語教育年数 | 20年以上 14(36.8), 3年以上10年未満 9(23.7) 10年以上15年未満 7(18.4), 15年以上20年未満 5(13.2) 1年以上3年未満 3(7.9), 1年未満 0 |
| 日本語指導の場所 [海外の内訳] | 日本国内 15(39.5), 海外23(60.5) ベトナム 8(34.8), 英国 6(26.1), タイ 3(13), 中国 2(8.7), インドネシア, フランス, パラグアイ, カナダ 各1 |
| 日本語指導の機関 | 大学・大学院 31(81.6), 高校 2(5.3), 中学校 2(5.3), 小学校 1(2.6), 日本語学校 9(24.3), その他(技能実習生の送り出し期間など) 4(10.5) |
| 合計 | 38 |

3. 調査の結果

1) スピーチの指導に関する調査項目

スピーチの指導に関する調査項目の結果を示す。

どのようなスピーチ指導を行ったか、テーマはどのようなものだったか、スピーチの指導にあたって非言語行動を指導するか、具体的にどのような非言語行動の指導を行うか、どのように考えて非言語行動の指導を行うか、についてまず聞いた。結果を表2に示す。

表2 スピーチの指導について

単位 人(%)

| | |
|-----------------------------|---|
| どのようなスピーチ指導を行ったか (複数回答可) | 授業内のスピーチ 30, コースの発表会のスピーチ 13, スピーチコンテストのスピーチ 18, その他 |
| スピーチのテーマ (自由記述, 複数回答可) | 専門分野の紹介や調査結果の報告, 異文化体験や日本と自国との違いについての発表, おすすめ本の紹介(ビブリオバトル), 社会問題についての意見表明, 余暇, 起業, SDGs, 未来の私, 母親への手紙, テーマは自由だがメッセージ性のある内容 など |
| 非言語行動の指導をするか | する 12(31.6), 少しする 26(68.4), あまりしない 0, 全くしない 0 |
| どのような非言語行動を指導するか (複数回答可) | 視線 33, 頭の動き 13, 顔の表情 24, 手のジェスチャーや動き 26, 姿勢 28, 体の動き 14, 服装 12, 声のトーン・声の強弱・話の間 1, その他 |

| | |
|--|---|
| <p>どのような考えで非言語行動の指導をするか (自由記述)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・聴衆に伝えたいことを効果的に伝える際に、非言語行動は重要である。 ・聴衆に不快感や失礼な印象を与えないような非言語行動を重視して指導している。社会人になった際にも必要となる知識である。 ・まずは内容が重要であり、非言語行動は補助的なものだと考えている。 ・非言語行動は文化や個人の影響も大きく、強い指導はしない。修正の対象ではない。 ・スピーチコンテストなどの場合には評価の対象となることもある。 |
|--|---|

2) スピーチの評価に関する調査項目

次に非言語行動への評価について、視線行動、顔の表情、手のジェスチャーや動き、どのような考え方で評価を行うかについても尋ねた。表3に示す。

表3 スピーチの評価について

単位 人(%)

| | |
|--|--|
| <p>視線行動をどう評価するか</p> | <p>視線を満遍なく向けていることを評価 25(65.8), 視線を前に向けていることを評価 6(15.8), 視線は評価に関係しない 1(2.6), その他 5(13.0), 評価したことがなくわからない 1(2.6)</p> |
| <p>顔の表情をどう評価するか</p> | <p>表情が自然であることを評価 20(52.6), 表情豊かなことを評価 11(28.9), 表情は評価に関係しない 4(10.5), その他 2(5.3), 評価したことがなくわからない 1(2.6)</p> |
| <p>手のジェスチャーや動きをどう評価するか</p> | <p>使うことを評価 19(50.0), 適切あるいは自然なら評価 4(10.5), 使わないことを評価 1(2.6), 評価に関係しない 8(21.1), その他 5(13.2), 評価したことがなくわからない 1(2.6)</p> |
| <p>どのような考えで非言語行動の評価をするか (自由記述)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・スピーチは発話だけではなく非言語行動も加わって効果的に伝わるものなので、重視すべきだ。 ・非言語行動はスピーチの評価に大きい影響を与える。 ・表面的な非言語行動ではなく、スピーチの内容を伝えるために表出される自然なものが重要だ。 ・聴衆を意識してスピーチを行うという中の一つとして非言語行動がある。 ・スピーチを行う会の性質によって、評価するのかわからないのか、どう評価するのか異なってくる。 ・スピーチの評価項目に含まれていない、あるいはパラ言語の方が重要なため、あまり非言語行動を重視していない。 |

V 考察

1. スピーチの指導について

今回の回答者のほとんどは通常の授業の中でスピーチの指導を行っていた。その上で、コースでの発表会やコンテストへの出場の指導なども行なっている様子が浮かび上がる。スピーチのテーマは多岐にわたるが、自分の専門の説明や調査の結果報告、異文化体験や日本と自国の違いなどについての発表、現在の社会問題などについての意見表明などが中心となる。

非言語行動の指導については、あまりしない、あるいはしないと答えた教師は全く

いなかった。何らかの形で全員が指導しており、全体の3分の1近くの教師は「する」と回答し積極的に指導していると思われる。ではどのような非言語行動を指導しているのだろうか。複数回答を可能とした質問であるが、「視線」が最も多く、「姿勢」、「手の動きやジェスチャー」、「顔の表情」と続く。いわゆるパラ言語と呼ばれる「声のトーン・声の強弱・話の間」については、意外なくらい数が少なくわずか1人だけの回答である。これらの回答からは、教師はスピーチの際に学生がどこを見て話すかということに重視していることがわかる。それに加えて、顔の表情と姿勢や手の動きにも焦点を当てている様子が窺われる。なお、今回の調査の結果について、教師の指導地や母語などによって回答に差が出るのかも見てみたが、特に有意差と言うべき結果はなかった。

自由記述から、もう少し教師の非言語行動の指導に関する基本的な考え方を探ってみる。たとえば「伝達したいことをより効果的に伝える手段だから」、「視聴者への説得力を高める」や「オーディエンスの注目を浴び、自分が言いたいことを強く伝え、印象に残るスピーチには非言語行動も必要不可欠だ」などのように、話者が聴衆を意識しスピーチの説得力を高めるために重要だという記述が多く見られた。ただし聴衆を意識するという点でも、「聴衆が不快感を持たないように」といったマナーの観点からの指摘もあり、非言語行動を戦略としてとらえるか、基本的なマナーととらえるかの異なりがあるようである。一方で「スピーチの内容・構成を指導することを優先した上で、発表時にスクリプトを見るだけでなく聴衆を意識するよう、伝える程度」といった内容の記述もあり、スピーチの内容が基本となり、それに加えるようなものとしての非言語行動の指導があるという考え方も見られた。また留意すべきこととして、「非言語行動の必要性はスピーチ場面にもよる」という記述や、「スピーチコンテストでは審査項目に入っていることもある」という指摘がある。確かに、スピーチの種類や場面によって非言語行動の重要性が異なってくることがあるかもしれない。クラス内での課のまとめとしての口頭発表などの場合には、それほどかしまったスピーチが求められないと思われるが、スピーチコンテストのような場合には、正式でアピール度が高い発表をすることが期待され、さらには評価項目の一部として非言語行動の評価が含まれているケースもあるだろう。このようなケースでは、非言語行動の指導にも力が入ることも考えられる。ただし、非言語行動は「修正の対象ではない」とか「必要性の認識はあるが体系的・計画的に指導しているわけではない」という記述もあり、非言語行動の指導を全くしないということはないものの、どの位重視するのか、スピーチの種類や場で異なるのであれば、どのような時に重視すべきなのかなど、決まった答えがないことも多いのではないかと考えられる。それらを明らかにしていく必要があると思われる。

2. スピーチの評価について

視線行動、顔の表情や手のジェスチャーや動きのそれぞれの非言語行動について、どのような考えで評価を行うかについて考察する。

まず視線行動については、視線を満遍なく聴衆に向けていることを評価すると答えた回答者が最も多く7割弱を占めており、これに視線を前に向けていることを評価と答えた回答を加えると、ほとんどの回答者が聴衆の方に視線を向けることが重要だと考え、たとえば原稿に目を落としたままでスピーチをするといったことについては否定的な評価をしていることがわかる。

次に表情であるが、半数以上の教師が「自然な表情」を評価し、「表情豊か」は3割の教師が評価すると回答している。どの程度の表情かは差があるが、8割以上の教師が表情も評価の対象だと考えていることになる。一方、表情は評価の対象ではないとしたのは4人でそれほど数が多いわけではないが、全員が日本語母語話者の教師であった。ちなみに「自然な表情」を評価するとした教師は、日本語母語話者教師が日本語以外の言語を母語とする教師の2倍、また「表情豊か」を評価するとした教師は逆に、日本語以外を母語とする教師が日本語母語話者教師の2倍の人数であった。統計的な有意差があるとはまでは言えないが、表情をどのくらい重視するかには文化差や言語差がある可能性もあり、今後深く検討すべき内容であると思われる。

手のジェスチャーや動きを使うこと自体を評価する、あるいは「適切あるいは自然なら」評価するとした回答は7割強であった。評価に関係しないという回答も2割以上を占め、前述の表情に比較すると、やや教師の対応が分かれるところかもしれない。

自由記述から回答の傾向をもう少し探ることにする。非言語行動の指導に関する自由記述の意見と同様、「スピーチを効果的に伝えるのに非言語行動は重要であり、評価もする」という回答が多く見られた。また「スピーチコンテストなどでは評価の基準に含まれていることもあるため評価する」という意見と、逆に「コンテストの評価項目に含まれていないのでそれほど意識しない」という意見もあった。スピーチの場面によって評価するかしないかが分かれる場合もあろう。

表情や手のジェスチャーなどについては、大袈裟であるよりも自然であることが重要だという回答も散見された。しかし「自然である」ことの基準は何なのか、指導者あるいは学習者の言語・文化圏で異なるのかなど、深い調査が必要であろう。非言語行動の中でも視線行動については指導でも評価でも重視されることが多く、顔の表情や手のジェスチャーの扱いについてはさまざまな要素の影響を受け異なる結果になると思われる。

VI 終わりに

スピーチにおける指導や評価について、教師がどのように捉えているかを調査項目から検討してきた。全体的にはスピーチの内容そのものについての重要性は言うまでもないが、その内容を伝えるために非言語行動の指導や評価は重視すべきだと概ね見做されていることがわかった。しかしその指導の仕方、評価の仕方、さらにどの程度力を入れて行うのかについては、さまざまな異なる見解があることも明らかになった。

またそもそも非言語行動は学習者個人が元来持っている個性の一部だという考え方もあり、どれだけ指導できるものなのか、あるいは指導すべきものなのかという問いは残ったままである。今後はスピーチ指導や評価に携わる日本語教師、さらには指導を受ける日本語学習者にも詳しいインタビュー調査を行っていきたい。また他の言語でのスピーチの指導や評価と差異があるのかどうかも調査し、パブリックスピーキングにおける非言語行動の実態や影響の全体像を明らかにしたいと考えている。

【謝辞】

本研究のための調査にご協力いただいた日本語教師の皆様へ心から感謝いたします。

【付記】

本研究はJSPS科研費「パブリックスピーキングにおける「説得」のマルチモーダル分析」(研究代表者：深澤のぞみ，研究分担者：山路 奈保子・須藤 秀紹・大江 元貴，課題番号：19K00706)の助成を受けて行われた。

【注】

- 1 深澤のぞみ(金沢大学)，森本一樹(リーズ大学)，梅澤薫(ダラム大学)，根津誠(国際交流基金日本語国際センター)
- 2 社会心理学では、聞き手の態度を変容させることを説得と考える。
- 3 Miller, N., Maruyama, G., Beaver, R.J., & Valone, K. (1976) 'Nonverbal concomitants of perceived and intended persuasiveness' *Journal of Personality and Social Psychology*, 13, pp.37-58 および Apple, W., Streeter, L.A., & Krauss, R.M. (1979) 'Effects of pitch and speech rate on personal attributions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, pp.715-727
- 4 2020年6月には第61回の大会が予定されていたが、新型コロナウイルス感染拡大のために中止された。

【参考文献】

- 国際交流基金関西国際センター(2004)『初級からの日本語スピーチ』凡人社
国際交流基金(2007)『日本語教授法シリーズ6 話すことを教える』ひつじ書房
スナイダー美枝(2010)「発表の身体動作について：非言語コミュニケーションとしてのスピーチ」『語学教育研究論叢』第27号，大東文化大学，pp.309-323
高橋伸光(2005)「教科目「国際ビジネスコミュニケーション」におけるプレゼンテーション教育について--デリバリー・スキルを中心にして」『国際ビジネスコミュニケーション学会研究年報』64号，pp.59-69

- 高橋伸光(2006)「プレゼンテーションにおける非言語コミュニケーションー動作ならびにアイ・コンタクト」『国際ビジネスコミュニケーション学会研究年報』65号, pp.41-50
- 高橋伸光(2007)「プレゼンテーションにおける非言語コミュニケーションーパラ言語」『国際ビジネスコミュニケーション学会研究年報』66号, pp.71-83
- 高橋伸光(2009)「マネジメント・コミュニケーションにおけるプレゼンテーション教育についてー非言語コミュニケーションを中心にして」『国際ビジネスコミュニケーション学会研究年報』68号, pp.21-37
- 東海大学留学生教育センター 口頭発表教材研究会(1995)『日本語 口頭発表と討論の技術ーコミュニケーション・スピーチ・ディベートのために』
- 成田高宏・猪狩 英美・森本 由佳子・坂本 裕子(2010)「ロシア極東・東シベリア日本語弁論大会」における審査基準作成」『国際交流基金日本語教育紀要』(6), pp.91-123
- 平林由紀子・藤田雄介・吉永智明・北原義典(2016)「説得力の強さを感じさせる話し方における非言語情報の特徴のモデル化」『ヒューマンインターフェース学会論文誌』Vol.18, No.4, pp.425-434
- ヒルマン小林・深澤のぞみ(2011)「日本語教科書における口頭発表指導についてー日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した基礎研究ー」『金沢大学留学生センター紀要』第14号, pp.29-42
- 深澤のぞみ(2019)「日本語パブリックスピーキングのマルチモーダル分析のための予備的研究」『金沢大学国際機構紀要』第1号, pp.99-113
- 藤本美奈子(2013)「好感を持たれるスピーチの要素に関する一考察」『桜美林論考 言語文化研究』第4号, pp.49-69
- 藤田朋世・フランプ順美(2009)「ピア・ラーニングの概念を取り入れたスピーチコンテストの試みー重慶大学での実戦報告ー」『世界の日本語教育』19, pp.199-213
- 藤原武弘(1986)「態度変容と印象形成に及ぼすスピーチ速度とハンドジェスチャーの効果」『心理学研究』第57巻第4号, pp.200-206
- 三浦香苗・岡澤孝雄・深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子(2006)『最初の一步から始める日本語学習者と日本人学生のためのアカデミックプレゼンテーション入門』ひつじ書房
- 矢野香(2015)「話の上手さ」に対する学生と社会人と人事担当者の判断要因の相違」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.16, pp.197-207
- 横山ひとみ・大坊郁夫(2008)「話し手の認知に及ぼすスピーチ速度の影響：話し手の信憑性および知覚された説得力に注目して」『対人社会心理学研究』8号, pp.65-70

Students' Nonverbal Behaviour in Public Speaking: Evaluations and Teachers' Perceptions

FUKASAWA Nozomi, MORIMOTO Kazuki, UMEZAWA Kaoru, NETSU Makoto

Abstract

The benefits of public speaking skills have been widely acknowledged in the teaching of Japanese as a foreign language. However, the treatment of nonverbal behaviour in Japanese speeches has not been studied in depth.

In our survey all teachers who have experience of teaching public speaking in Japanese responded that they give advice on nonverbal aspects of delivery and that this consists mainly of giving eye-contact, posture, hand movement, and facial expressions. The evaluation criteria seem to vary according to the type of nonverbal element. Each teacher expressed a different view and approach in the treatment of both teaching and evaluation of nonverbal elements of the speech and this requires further study.

Keywords: Public speaking, Nonverbal behaviour, Evaluation